

P2-043

子どもへの採血、静脈注射留置時の疼痛緩和～外用局所麻酔剤導入のマニュアル化について～

西川 恵利、谷川 佳央梨、吉丸 美鈴、
小川 えりか、石毛 美夏、小金澤 京子、
淵上 達夫

日本大学病院

【背景】

子どもは採血や静脈注射留置の際、過去の経験による痛みに対するトラウマや、馴染みのない環境下で行う処置に対して拒否を示すことがある。処置室に恐がり入れない、親の不安が解消されないなどから外来時間の延長や診療の遅れ、また今後の採血への予期不安となることがある。近年子どもの権利の主張やプレパレーション方法の向上など子どもへのケアに関して関心が高まっているが、採血時の外用局所麻酔剤使用に関する研究報告は少ない。今回どの医療者が介助に当たる際にも統一された方法で関わりが出来るよう、エムラクリーム使用手順をマニュアル化する必要があった。

【目的】

子どもがトラウマ体験となりやすい侵襲を伴う採血や静脈注射留置時の痛みを外用麻酔剤の使用により緩和・無痛化する。方法をマニュアル化することで介助者の経験値による差がないようにする。

【方法】

研究デザイン：実践報告対象：平成28年8月から平成29年2月 代謝外来定期受診時に採血を必要とする患児(男女1歳から6歳)エムラクリーム塗布から採血終了までを、人形をモデルとしてまとめたプレパレーションブックを作成し、運用方法についての手順をマニュアル化した。採血当日までに医師による家族と患児へのエムラクリーム使用の説明・同意をし、採血予定時間までには担当医師もしくは看護師にてエムラクリーム塗布から採血までの手順の説明を行なった。

【結果】

外来受診までにエムラクリーム使用患者(予定者含む)を看護師が把握し、マニュアル化して統一したプレパレーションツールを使用して説明することで医療者からの説明内容が統一化された。

【結語】

外用局所麻酔剤導入をマニュアル化することで、説明者に差がなく処置は定着した。

P2-044

短期入院で計画手術を受けた子どもの入院日と退院後の思い

森 浩美¹、板東 利枝¹、佐々木 俊子²

¹旭川医科大学医学部 看護学科、

²名寄市立大学 保健福祉学部看護学科

【目的】

本研究の目的は、短期入院で計画手術を受けた子ども(以下、子ども)の思いを明らかにすることである。

【方法】

子どもは知的発達が年齢相応、初回手術で悪性腫瘍や後遺症が残る場合は対象外とした。入院日と退院後初外来日に半構成面接を行い、逐語録から入院・手術に関する思いについて解釈し、特徴を記述した。本研究は病院看護管理者と診療科医師、研究者所属機関の倫理委員会の承認を得て実施した。

【結果】

症例1：6歳男性。入院する理由は「中耳炎、鼻がつまっている」、手術については「何か、採る」と理解し、「パパは来る」「入院の場所にいるまで(入院中)、おじいちゃん、おばあちゃんは妹のところにいる」と家族について話していた。そして、「妹も寂しいって言ったけど頑張るから、僕も頑張る」「心臓ドキドキする」「我慢はしないで、凄く痛くなったら言う」と思いつつ手術に臨んでいた。退院後は「寝ていたからすぐ終わって、痛くなかった」と振り返り、「ちょっと痛かったけど頑張ってきた」「口からゲボ、血が出たのを我慢した」「泣いていないと思う」「うがい、やったらできた」と嫌なことにも取り組んだ様子について語っていた。加えて、「もう治っている」と手術の効果や回復を実感し、「(入院中に)友達できた」「嫌だって言ったけど、楽しかった」とも思っていた。

症例2：12歳女性。頑張ろうと思うことは「特にない」と述べていた。そして、入院・手術について分からないことは「あまりない」と答えつつ、医療者には「もうちょっと話しかけて欲しい」「手術するから大丈夫だよとか(言って欲しい)」と思っていた。そして、退院後には「ちょっと辛かった」「立つのがいつもより大変だった」と振り返りながら、「友達できたから楽しかった」「治っていくから嬉しい」「(手術を)する前は緊張していたけど、終わってから、もう終わったみたいな感じ」と安堵していた。

【考察】

子どもは子どもなりに入院・手術の目的や必要性を理解し、頑張ろうと思っても、不安を完全に解消することはできない。看護師には子どもの不安や緊張を少しでも解すように支援する役割があると考え。そして、入院・手術は子どもにとって辛い体験である。看護師は子どもが自分の頑張った姿も含めて、入院中の楽しかった出来事も想起できるようにしつつ、手術後の回復や効果について子どもと共有することが重要と考える。